

# 農業の新しい技術

No. 668(平成26年5月)  
分類コード 02-04  
熊本県農林水産部

## イチゴ「ひのしずく」の夜冷短日育苗の定植に適した花芽分化ステージと年内収量確保

農業研究センター 農産園芸研究所野菜研究室  
担当者：田尻一裕

### 研究のねらい

本県で育成した「ひのしずく」は、大果・良食味といった果実品質の評価は高いが、頂花房の花芽分化が遅いという特性があり、その対策として夜冷短日育苗（以下、夜冷育苗）技術を確立した。しかし、生産現場において年内収量をさらに安定させるためには、年次気象の影響に対応できる技術が必要である。

そこで、夜冷育苗の定植に適した花芽分化ステージと気象の影響を軽減する技術を構築し、年内収量を確保する。

### 研究の成果

1. 収穫開始は、10月下旬の開花後の気温の影響を強く受ける。平年より気温が高い年（H23）は成熟が早まり、平均果重は軽くなる。一方、気温が低い年（H24）はその逆の傾向を示し、年内収量には年次間差が生じる（図1、表1、表2）。
2. 夜冷育苗において肥厚初期～後期で定植すると、年次気象を問わず年内収穫果数が安定し、一定の年内収量が確保できる。一方、ガク片形成期で定植すると、特に低温の年の場合に収穫開始が遅れ、年内収量は大幅に減少する（表2、図2）。
3. ガク片形成期以降で定植を行う場合は、定植前にポットへ液肥施用を行うと、苗の老化に起因する年内収量の低下を回避できる（図3）。

以上から、夜冷育苗の定植に適した花芽分化ステージは、肥厚初期～後期である。台風の影響等により定植が遅れる場合は、定植前にポットへ液肥施用することで年内収量を確保できる。

### 普及上の留意点

1. 花芽分化ステージは、『いちご「ひのしずく」栽培管理指針（育苗編）平成24年度版』P.20 いちご花芽分化の判定【区分】を参照。
2. 夜冷短日処理については、農業の新しい技術 No. 558『イチゴ「熊研い548」の夜冷短日処理による早進化技術』に基づく。

[具体的データ]

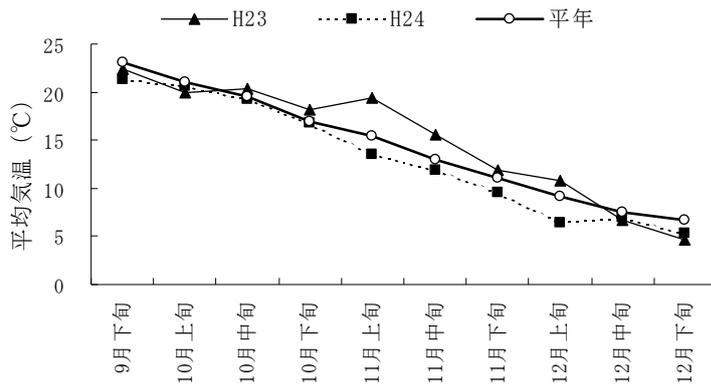


表1 10月下旬～12月上旬の平均気温 (°C)

年度	平均気温 (°C)
H23	15.2
H24	11.6
平年	13.1

注) 地点: 熊本市 (アメダス観測データ)

図1 9月下旬から12月下旬の平均気温の推移 (地点: 熊本市)

注) データはアメダス観測データ

年度	定植時の花芽分化ステージ	定植日 (月/日)	開花日 (月/日)	収穫開始日 (月/日)	成熟日数 (日)	年内可販果			
						平均重 (g)	収穫果数 (果/株)	収量 (g/40株)	収量対比
H23	肥厚初期	9/10	10/22	11/13	21	14.3	10.0	5,697	100
	肥厚後期	9/12	10/23	11/13	20	15.2	9.5	5,774	101
	ガク片形成期	9/17	10/24	11/15	21	14.7	8.9	5,211	91
H24	肥厚初期	9/15	10/27	11/24	27	21.9	8.2	7,215	100
	肥厚後期	9/18	10/28	11/27	29	21.8	7.3	6,398	89
	ガク片形成期	9/22	10/31	11/30	29	22.8	5.0	4,538	63

注1) 開花日及び収穫開始日は、頂花房の開花及び収穫始期の平均日

注2) 成熟日数は、頂花房の頂果の開花から収穫の前日までの日数

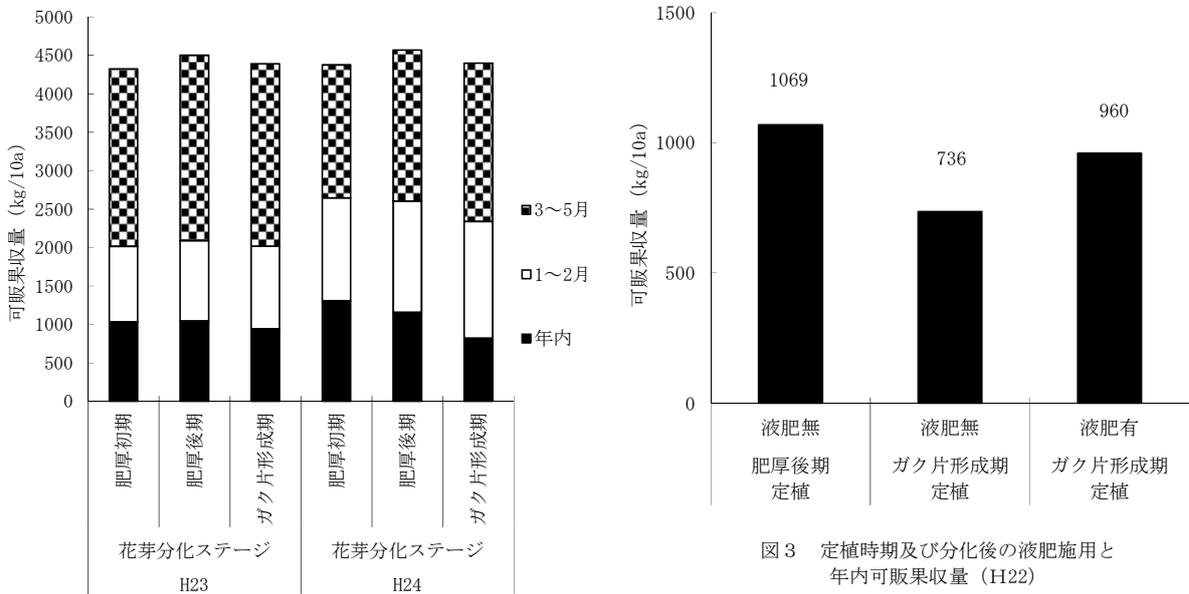


図2 夜冷育苗における定植時の花芽分化ステージと時期別可販果収量

図3 定植時期及び分化後の液肥施用と年内可販果収量 (H22)

注) 肥厚後期定植は9/19、ガク片形成期定植は9/23に定植を行い、液肥有は肥厚後期定植日にポットに400倍液肥を約200ml (N: 約50mg/鉢) かん注